公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第７回アスリート委員会議事録

１　日時

平成29年2月17日（金）14時00分～15時44分

２　場所

虎ノ門ヒルズ森タワー9階　会議室ＴＯＫＹＯ

３　出席者

＜アスリート委員(各委員は五十音順)＞

高橋委員長、河合副委員長、穴井委員、及川委員、小宮委員、杉山委員、関根委員、

萩原(智)委員、不老委員、三浦委員

＜臨時委員＞

戸谷臨時委員(東京都)、

十時臨時委員(内閣官房)

＜組織委員会＞

武藤事務総長、布村副事務総長、中村ＣＦＯ、室伏スポーツ局長、

吉村大会準備運営第二局長、福島会場整備局長、小野スポークスパーソン、

平山スポーツ局次長、佐々木アクション＆レガシー担当部長

〇高橋委員長

　それでは、定刻になりましたので、ただいまから第7回アスリート委員会を開催させていただきたいと思います。

　委員の皆様、年度末のお忙しい中、お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。委員長の高橋です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

　まず初めに、本日の委員会のメディアの公開についてお知らせをいたします。

委員の皆様には事前に御案内をさせていただきましたが、本日の委員会も記者の方にはフルオープンとさせていただきまして、最後まで傍聴いただきたいと思っております。なお、ムービー、スチールの方々は、これまで同様に会議の冒頭のみオープンとさせていただきますので、御了承よろしくお願いいたします。

早いもので、前回の委員会が7月に行われて、それから7カ月が経過しております。8月から9月には、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが開催されました。世界中のアスリートの活躍というのは、記憶に新しいことと思います。また、日本選手団も、オリンピックは過去最高の41個のメダル獲得、パラリンピックでも24個のメダル獲得ということで、日本でも応援をされている方々、大変盛り上がったと思っております。

そして、このアスリート委員会の中では、ボッチャの廣瀬委員が見事、銀メダルを獲得されました。ボッチャでのメダル獲得は、史上初めてとなります。今日、本当は出席の予定だったのですが、朝、体調が少しすぐれないということで急遽欠席になってしまいましたので、また次の委員会のときには、ぜひリオの思い出と、そして報告をしていただきたいなと思っております。

まだそれ以外の方々でも、リオ大会には選手、あるいはコーチとして出場された委員の皆様もおられます。本当にお疲れさまでした。そして感動を、どうもありがとうございました。

私もリオ大会には行かせていただいていたんですけれども、大会前には治安問題であったりとか、環境の不安なども本当に多く報道されていまして。不安もあったんですが、リオに行きますと、もうボランティア、スタッフ、そして地元の皆さん、そして大会を成功させようというのが応援にも非常に熱く表れていまして、すごく熱気を感じることができました。世界から集まるトップ選手、思い切り全力で戦う環境づくりというのは、やっぱりとても大切なんだなと。

多くのアスリートの経験を東京の舞台につなげていかなければいけない、その大切さを改めて感じるとともに、地元の方々のやはり理解だったり応援、そして思いというのも、やはり大会を成功させる上で非常に大切な要素だからこそ、東京2020大会を楽しみにしていただけるような、これから盛り上げやレガシー創出が必要ではないかなというふうに強く感じました。

東京2020大会に出場する選手もですし、関わる人、応援をする人、全ての心に今回のリオもですけれども、本当に一瞬一瞬が刻まれる、そんな大会ですので、東京に向けても気

が引き締まる、そんな思いをいたしました。もうあと3年半で東京2020参ります、ぜひ皆さんもどうぞよろしくお願いいたします。

河合さんは、リオでの何か思いはありますか。

○河合副委員長

リオでの思いですか。

○高橋委員長

リオに行かれていましたよね。

○河合副委員長

行きました、パラのほうに。3週間ぐらい行っていましたので。どちらかというと、今回、僕はサポートする側の仕事だったんですけれども、本当に選手の頑張りとか。

日本では、それこそ選手の活躍を、報道量が非常に増えた、ロンドンまでと比べて3倍以上に増えたということも含めて大きな変化が国内でもありましたし。

今回は、組織委員会のアスリート委員として聖火リレーも走らせていただいたりもしましたので。そんなところも含めて、盛り上げ方とか、これから2020に向けて頑張っていかなければならないなと思いました。

○高橋委員長

突然の振りで、どうもすみません。

○河合副委員長

いえいえ。びっくりしました。

○高橋委員長

それでは、本日の議題の説明のほうに移ってまいりたいと思います。手元の次第を御覧ください。

本日の議題は5点となります。ぜひ委員の皆様の活発な御発言を、よろしくお願いいたします。

なお、本日はお手元の座席表のとおり10名のアスリート委員と政府、東京都から1名ずつ臨時委員として御出席をいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

それではこの後、議事に入りますので、ムービーとスチールの方々は御退席いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

（プレス　退室）

○高橋委員長

それでは、これより議事に入りたいと思います。

まず初めに、東京2020大会の準備状況について、事務局より御説明のほどをよろしくお願いいたします。

○中村局長

お手元、資料2を御覧いただけますでしょうか。昨年どのようなことがあったのか、そして、今年、何を行うのかということを簡単に御紹介したいと思っております。

まず、1ページ目でございますけれども、昨年の主なトピックスを振り返りますと、4月に、大会エンブレムが決定いたしました。その後、7月にこのアスリート委員会でも御審議いただきましたが、2020年までどういうアクションをしていくのか、その後2020年以降どういうレガシーを残していくのかというアクション＆レガシープランをまとめまして、これを公表させていただきました。

それが終わりまして、リオ大会が始まったわけでございますけれども、その直前に行われました8月3日のIOC総会で、東京2020大会での追加種目5種目を最終的に正式決定いただきました。これで野球・ソフトと空手とスケートボード、サーフィン、スポーツクライミングが新たな種目として2020年に追加されることになったわけでございます。

リオ大会が8月から9月ございまして。後でちょっと御説明しますが、東京2020ジャパンハウスであるとか、フラッグハンドオーバーセレモニーということで、組織委員会もこれに参画をいたしました。

10月、記憶にもまだ新しいかと思いますけれども、リオが終わった後ということで、メダルをとられた方々で、オリンピックとパラリンピック合同で選手団のパレードをいたしまして、多くの方に来ていただいたということでございます。同時に10月から、今日、御報告いたしますけれども、東京2020の参画プログラムがスタートいたしました。

11月、12月は、報道等で皆様も御覧になったかと思いますけれども、会場についての検討と、あとは大会に向けた予算の総枠、あるいは大会組織委員会の予算に関するIOCと東京都、国、組織委員会の4者協議が開催されたところでございます。

12月には、2020年大会に向けたボランティア戦略の策定を行いました。

2ページ目はリオ大会でございますけれども。リオ大会の中心は当然アスリートでございますけれども、組織委員会といたしましても、ここにありますとおり、JAPAN HOUSEを東京都、JOC、JPCとともに主催をいたしました。

ここでは東京の魅力、日本の魅力、世界各地の魅力、あるいは文化・伝統などをいろい

ろ見せ物として用意いたしまして、日本人の方、日系ブラジル人、あるいは観光客の方だけではなくて、現地の方に非常に多くおいでいただきまして、連日、非常ににぎわったということでございます。地元のマスコミでもかなり、ここはいいところだというところで、報道をされたというふうにも聞いております。

また、このJAPAN HOUSEでは、史上最多のメダルをとった、そのメダリストの記者会見が行われました。ここでもマスコミの方に多く集まっていただきまして、その模様が日本全国で報道されたところでございます。そのほか、IOCやその他国際連盟、NFの方々のホスピタリティや事務室機能なども備えたものでございます。

おめくりいただきまして、もう一つ組織委員会が参画いたしましたのが、フラッグハンドオーバーセレモニーでございます。オリンピックでの安倍総理が登場した場面、パラリンピックでいろいろ障がいを持たれた方が元気に踊り、パフォーマンスに加わっていた姿など御記憶にあろうかと思っております。また、閉会式では、都知事がオリパラの旗を引き継ぎまして、これを東京に持ち帰ったというところでございます。

また、先ほど高橋委員長のほうから、リオ大会で、やはりボランティアというところが目についたということをおっしゃっておりましたけれども、我々もリオをいろいろ勉強させていただいて、やはりボランティア、非常に大事だと認識を新たにいたしました。

そういった勉強成果も踏まえまして、ボランティア戦略というものを昨年の12月に発表いたしました。その概要はここにありますとおり、これから東京都をはじめ各関係自治体、あるいはスポンサー、大学などと連携していく必要があるというところと。あとは、ボランティアにつきましても、多くの方のいろんな方々に参画していただきたいと、障がい者や小さな若い生徒などにも参画をお願いしたいということでございます。また、応募条件、応募方法、これもこれから詳細を詰めておりますけれども、わかりやすい広報に努めたいというふうに思っております。また、都市のボランティアを東京都でも募集するということでございますので、東京都と組織委員会で共通の研修を実施するなども進めていきたいと思っております。

いずれにいたしましても、ボランティアとは大会そのもののサポート、アスリートのサポートをするという大事な役割に加えまして、それに向けて大会の機運を盛り上げると、参画の機会を広くしようという大事なミッションがございますので、そういったところを早いうちから皆様の意見を聞いて、形にしていきたいというふうに考えております。

5ページ目が、それでは2017年、これから何が起きるかということでございます。ここ

では、大きく四つ挙げさせていただいております。

一つが、6ページ目の大会マスコットの選考でございます。1月に選考委員会が発足いたしまして、この委員会からは杉山委員に御参加をしていただいておりますけれども。まだ応募方法の議論ではございますけれども、大変活発な御議論をいただいております。公募するのかどうか、あるいはデザインをどのような形で応募していただくのかどうかといったところを議論していただいております。

ここではリオのマスコットと、右側はロンドンのマスコットでございますけれども、こういった過去の大会も踏まえまして、日本は非常にそういうマスコット、アニメキャラクターなどが非常に世界的にも有名でありますので、いいものをつくっていきたいというふうに考えております。また、つくるに当たっても多くの方が参画できるような形を模索していきたいというふうに思っております。

7ページ目が、聖火リレーの検討開始でございます。先ほど河合副委員長から、リオのパラの聖火リレーに参画いただいたということございまして、私も報道で拝見させていただきました。次はいよいよ2020年に向けた検討ということでございまして。これは非常に、100日前ということでございますので、2020年の春ごろからということだとは思いますけれども、ルートなどは今後の話として、まずはどういうコンセプトでやっていくのかといったところを、この聖火リレー検討委員会で検討していただきたいというふうに思っております。

そういった基本コンセプトが固まった後に、じゃあ、どこを、何日ぐらいかけて走るのか、具体的にどういう方がランナーとして参加するのかといったところが、非常に注目を集めるということだと思いますけれども。まずは基礎固めをきちんとやっていく必要があるのではないかと。2017年夏ごろには基本コンセプトをIOCに提出をしていきたいというふうに考えております。

開・閉会式の検討でございます。これも非常に大きなものでございまして、2020年に向けてようやくこれから検討を開始するところでございますけれども。これにつきましては、アスリート委員会の方々にもちょっと御意見をいただきたいと思っておりますので、これは後ほど御説明をいたします。

また、都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクトということをスタートさせていただきました。これも、みんなの参画と2020年のアスリートの胸に輝くメダルを結びつけるというプロジェクトでございます。これについても非常に大きなプロジェクトとして

進めていきたいと考えておりますので、またお時間をいただいて、御説明をしたいと思っております。

ということで2017年、16年はいろいろ計画のような抽象的な話が多かったわけでございますけれども、今、申し上げたようにマスコットをどうするのか、聖火リレーをどうするのか、開・閉会式をどうするのか、そのほか、本日御意見をいただきたいと思いますけれども、選手村などアスリートの活躍していただく環境についても具体的な検討がどんどん進んでまいりますので、引き続き、委員の御審議をお願いしたいというふうに思っております。

以上でございます。

○高橋委員長

ありがとうございました。

それでは、議題に入っていきたいと思っております。

議題1です、アスリート委員会の活動報告です。

一つ目の議題、アスリート委員会の活動報告についてなんですが、まず私からWG1の御報告、そしてその後に河合副委員長からWG2の御報告を続けてさせていただきたいと思います。

まずは、資料3-1を御覧ください。前回のアスリート委員会で設置を決定した二つのワーキンググループについて、これまでの活動状況を御報告させていただきたいと思います。

おさらいになるんですが、WG1は、大会エンゲージメントの推進や大会の先のレガシー創出というのを目的にしております。また、WG2は、大会におけるアスリート向けのサービスレベルを設定するプロセスにアスリート委員が関与し、支援をすることを目的にしております。

2ページを御覧ください。WG 1の主な取組内容は、二つでございます。一つは、イベント等の大会エンゲージメント活動にアスリート委員が協力をしていくこと。そしてもう一つは、大会の盛り上げやレガシー創出につながるアクションについて、大会スポンサーやステークホルダーと意見交換を行って、具現化を目指していくということです。

3ページを御覧ください。その意見交換を、第1回目、去年12月22日に開催をいたしました。まずお集まりいただきましたパートナー企業や関係ステークホルダーに対して、これまでアスリート委員で提案してきたレガシー創出、また大会の機運醸成のアクションアイデアを御説明させていただいたんです。これは今まで何度も何度もこのアスリート委員の

中で、アスリート自身が何か盛り上げに対してやることができないかということで、たくさんの意見をいただきました。それを何とか現実に実現できるような形で企業、またステークホルダーの皆さんが一緒にやっていただくことはできないかということで、ある種プレゼンのような形で取り組ませていただいた次第です。

その後からパートナー企業の方、また関係ステークホルダーの皆様方が同じような取組をしている、そういった取組や独自の取組をしていること。また、アイデアに関する取組の御紹介なんかをいただいて、今後またアイデアの具現化を視野に、一緒にできるんじゃないかということで、意見交換を行わせていただきました。

参加をさせていただいた皆さんは、非常に興味を持ってくださる方も多くてですね、非常に有意義な意見交換の場となったのかなというふうにも感じております。

今後も引き続き、この意見交換というのはもっともっと広げていきまして、皆さんに出していただいたそのアイデアの実現を目指して頑張っていきたいと思っております。

そして、4ページ目を御覧ください。ここから12ページまでは、アスリート委員が協力をした大会エンゲージメントについての御報告となっていきます。

まずは4ページなんですけれども。リオ大会の期間中には、東京2020ライブサイトin2016というところで、そのステージに河合副委員長ほか委員の皆さんが登壇されて、競技放送の解説等の際、会場を大いに盛り上げていただきました。そちらの写真のほうも載っております。

また、12月に宮城県で行った、「みやぎアスリート2020」指定書交付式に同県出身の菅原委員が出席して、そして村井知事へ公認マークを贈呈するとともに、指定選手へ激励のメッセージを送っていただきました。

6ページを御覧ください。11月に福島県で行った、オリンピック・パラリンピックフラッグツアーでは、同県出身の萩原美樹子委員がステージに登壇して、地域の子供たちと交流を図っている写真も載っております。

また、7ページを続いて御覧ください。こちらでも皆さんがされているところが載っておりますけれども、組織委員会、東京都、JOC、JPC、都内で東京2020オリンピック・パラリンピックフラッグツアーを開催をしておりまして、12月には稲城市のセレモニーで田口委員が御出席されました。これが7、8のところで載っております。

そして9ページを御覧ください。同じく都内でフラッグツアーにおいて、先日30日、渋谷区のセレモニーには、廣瀬委員が御出席された模様が載っております。

10ページにも、フラッグツアーの模様が載っております。

私も明日、朝ですけれども、青梅のほうでのフラッグツアーに行かせていただきたいと思いますので、いろんなところでアスリートの皆さんが活躍をされている模様をここに載せさせていただき、御報告させていただきました。

そして、11ページを御覧ください。今月25日には、去年に引き続いて、一般財団法人東京マラソン財団の協力を得まして、東京マラソンのEXPO2017の会場において、ステージイベントを開催をさせていただきます。

去年はアスリート委員の皆さんにも御参加をいただきまして、去年はリオの直前ということで、アスリート委員の皆さんから、もっともっと大会、そして競技を知ってもらいたいということを踏まえて、まだ認識が少し、知名度が少し高くない、そんな競技の魅力だったり、またルール、驚く情報などを通じて、競技と競技の枠を超えてファンを広げるような意味合いで、東京マラソンの会場をお借りして、そして活動をしてまいりました。

今回はリオ大会の後ですので、リオに出た、リオパラリンピック銅メダリストの芦田創選手をお迎えしまして、リオ大会での感想や感動を伺いながら、1人でも多くの方にオリンピック、またパラリンピックに興味を持ってもらって、東京2020大会を楽しみにしていただける方が1人でも増え、そして機運醸成につなげていきたいなというのを狙いでやらせていただきたいなというふうに思います。

非常に短い時間のところで、こちら去年と同様に続いてやりたいなということを河合副委員長とお話をして、実現までたどり着いたので、なかなか皆さんに御報告をすることがなかったんですが。これ1年、2年と続くことができたので、3年、4年というふうに東京に向けても続けていきたいなというふうに思っておりますし。そのときは、本当に事前にもっと皆さんにも声をかけて、もっともっと多くのアスリート委員の人たちにも参加をいただいて、盛り上げていただく側で頑張っていただきたいなというふうにも思っております。

そして、12ページを御覧ください。こちらは去年の様子です。リオ大会に向けてオリンピック・パラリンピック競技の魅力紹介などをして、大変盛り上がりました。

ワーキンググループの活動報告は以上になります。今後も委員の皆さんにはイベント等に御協力をいただきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

続きまして、河合副委員長からWG2についての御報告、よろしくお願いします。

○河合副委員長

では、よろしくお願いします。では、私のほうからは、WG2の報告をします。同じよう

に資料3-1で13ページから、よろしくお願いしたいと思います。

まずWG2というのは、先ほど高橋委員長からあったように、アスリートのサービスに関する部分を、しっかりとアスリートの視点を加えてチェックをしながら進めていこうというグループになります。

この最初の取組として、まず,リオに出場したオリンピアン、パラリンピアンに対してアンケート調査を行ったというのが大きなポイントになります。

では、14ページのほうになります。このアスリート委員会で作成をしてきたそのアンケート用紙を、オリンピアン、パラリンピアンに,今回リオに出場した選手たちにアンケート、300名からの回答をいただくということができました。御協力ありがとうございました。

では15ページになります。ここでは、空港とか、輸送とか、アクセシビリティとか、さまざまな視点でアスリートが享受するサービスのイメージをここでは示しているという形になります。

では16ページになります。メインテーブルのこちらの皆さんには、別途資料3-2がありますので、そちらも見つつお聞きいただければと思っております。食事とか輸送、スタッフですね、こういった部門に多くの期待が寄せられていることがコメントの中でも出てきております。

特に、やっぱり食に対する多くのコメントがありました。メニューの配置場所とか、どこに置いたほうがいいかという場所の指定とかまで、割と細かなところも含めて多くの声がありました。あと、選手村の中に、やっぱり試合に集中できるような配慮ができるようなこともつけ加えてありました。

そしてまた、輸送の部分では、競技に関係する道具を運んだりする関係から、こういうところでストレスがなくなるような支援もお願いしたいということもありましたと。

続いて、17ページになります。大会運営を支えるスタッフについても、多くのコメントがありました。やはりボランティア教育です、やっぱりここをしっかりやってほしいと。やっぱり苦情につながらないように、そういう教育、研修の機会を徹底することが大切ではないかという声が、ここにありました。

そしてあと、競技会場とか練習会場についても、やっぱり選手が練習、競技に、本番に集中できるような環境を提供してほしいということです。そしてあとは、セキュリティの部分もしっかりと担保してほしいということがあります。

では、続いて18ページをお願いします。アクセシビリティについてになります、ここは。特にパラリンピックの選手たちにとっての配慮が十分必要だと。空港の手荷物の預け、あるいは受け取りという部分とかがストレスなくできるようにということ。そして、ぜひ期待としてもサポート環境をより充実してほしいということで、ここでも多くの選手からの生の声をいただくことができて、非常に有意義な声があったのではないかというふうに思っております。実際にこの意見を、貴重な声を生かしながら、これからの具体的な活動につなげていきたいなというふうに考えております。

では19ページをお願いいたします。このアンケート結果をしっかりと、今、組織委員会のFAのほうに、これを今フィードバックしている作業になります。こういった食事、選手村のサービスとか、こういった部分についても個別に、具体的にこのWG2としても今、やりとりを始めているところになります。後ほど大会事務局の吉村局長からも、この選手村について説明があると思いますので、詳しくはそこで選手村のことはお聞きいただければと思っております。こういった選手村に関する計画についても、WG2として既に話し合いをスタートしているということになります。

今このようなところが、WG2の報告は以上になるんですけれども、昨年12月にIOCの調整委員会等でも、このWG1、2と分けてアスリートの声をしっかり届けていくということを報告したところ、調整委員会のほうからも、非常にすばらしい取組であるということや、役割分担も明確になっていてとてもよいという、こういう声をいただいていることも御報告しておきたいと思います。

こういった取組をさらに一生懸命やろうと思いますので、お忙しいとは思いますけれども、各委員の皆さんにもWG1､2のまた御案内が行くと思いますので、御都合をつけて御参加いただければと思います。

以上です。

○高橋委員長

河合副委員長、ありがとうございました。

今、WG1、そしてWG2の報告をいたしましたけれども、お話を聞いて御質問、御意見のある方がいらっしゃれば、挙手の上、御発言をよろしくお願いいたします。

昨年はリオ大会もございましたから、各委員の皆さんも非常にお忙しいこともあったと思います。WG1、2、なかなか会議も、それでたくさんすることができずに。これから、もっともっと詰めていってまいりたいと思いますので、先ほど河合副委員長がおっしゃられ

たように御報告、WG1、2の開催予定日がまた皆さんのところにまた回ってくると思いますので、ぜひ御参加の上、よろしくお願いいたします。

ここの報告については大丈夫でしょうか。後ほど皆さんに意見をお伺いしたいところがたくさんありますので、では次に進めさせていただきたいと思います。

それでは、議題2のほうにまいります。アクション＆レガシープラン2017及び東京2020応援プログラムの対象拡大についてです。

事務局から、まずは説明のほどをよろしくお願いいたします。

○佐々木部長

簡便に御説明さしあげます。

資料4のほうですけれども、1ページ目をめくっていただきまして。昨年度、アクション&レガシープラン2016、皆様の御意見をもとに世の中に公表しました。本年度は、この夏に2017を作成してまいりますけれども、根本的な考え方、特にレガシーの大きなテーマは、今回は「スポーツの力でみんなが輝く社会」ということになっておりますので、その中で、その頂点として「アスリートが活躍する社会の実現」というのがあります。

その拡大として、誰もがスポーツを「する・観る」社会の実現及び共生社会の実現というのがあります。なので大きなテーマは変わらないというふうに考えておりますけれども、足元でリオ大会を経まして、アスリートの皆様を取り巻く環境が変わったということの状況があれば、新たな視点を加えて変更をしていきたいというふうに考えています。

ですから、原則として抜本的なものは変化はないと思いますけれども、今日もし御意見があれば新たな視点を加えていただいて、今日御欠席の委員の方もいらっしゃいますので、その方にも御意見をいただきながら、事務局のほうで一旦まとめて、また次の委員会にかけさせていただいて、進めていきたいというふうに考えております。

昨年の10月に、東京2020参画プログラムというのを立ち上げまして、こちらのほうは目的が二つありまして、一つは大会の機運醸成及びレガシーの創出ということで、昨年の10月から立ち上げております。

2ページ目のほうを見ていただきますと、二つプログラムがありまして、左のほうは、いわゆるエンブレムが使える主体の事業が私どものほうに申請が上がってきまして、こういったマークを使って事業を展開していただくものです。

右側のほうは応援プログラムと言いまして、今年の7月から拡大をしていきたいというふうに考えておりますけれども、全国の方が自分たちのオリンピック・パラリンピックだ

というふうに感じていただくために、全国のいろんな団体の方が、行われる事業に対してマークを私どもから付与させていただくというもので、8分野に分かれて、今々で申請を上げていただいて、認証しているものです。

ただ次のページ、3ページを見ていただきますと、10月から始まっていますので、件数としましては約350件ありまして。東京都さん関連で約30%、スポンサー関連で約25%、4分の1です、ということがアクション数として昨年の10月から上がってきているということです。

分野といたしましては、やはりスポーツ・健康というのは約4分の1を占めておりまして。あとは文化、こちらのほうでトータルで約7割ということになっています。あと、学校の認証というのもやっておりまして、こちらのほうは東京都さんのほうで約2,200校、これを全国の自治体に広げる予定でございます。

事例としましては、4ページ、5ページにありますけれども。例えば4ページのほうは、フェンシングの会場であります千葉県さんのほうで、千葉県庁様の主催の事業がありまして、それを公認プログラムということで展開しているということです。

5ページのほうは、香川県のほうで「障害者スポーツとそのあくなき挑戦者」というタイトルでシンポジウムをやられましたんで、こちらのほうに、これは応援マークになるんですけれども、つけさせていただいて、展開していただいているプログラムということになります。

今後なんですけれども、先ほど申し上げましたように、2017年度の夏に応援プログラムを拡大していきたいというふうに考えておりまして、それを2020につなげて、その後のレガシーとして継続していくということを、今々では考えているということです

7ページのほうにいきまして、じゃあどういう団体に広げるのかということなんですけれども。先ほどの話で、公認プログラムのほうはエンブレムが使える主体だけでございますので、応援プログラムのほうも拡大を図っていきたいというふうに考えております。公共団体、市町村、商店街とか自治会とかですね。スポーツ関連でいいますと、国内の競技団体様、体育協会様に広げていきたいというふうに考えております。ここに書いてあるとおりの団体様のほうに広げていきたいというふうに考えると、皆様が先ほど申し上げた、自分たちのオリンピック・パラリンピックだという意識を持っていただくというふうに考えております。

8ページのほうは御参考までということで、現状こういった団体の方に事業を挙げてい

ただいているということで、御参考までにということでございます。

最後の9ページのほうは、こういった参画プログラムにつなげていきまして、2020の東京2020の大会が行われるときの4月ごろを予定していますけれども、フェスティバルを展開していきたいと思っています。これは、もともとその文化というところがありますけれども、幾つかの分野、盛り上がりを図るために、こういうフェスティバルを展開して、これはぜひ、これから検討していきますので、これに関してもまた御意見をいただきたいというふうに考えております。

私の報告は以上になります。

○高橋委員長

御説明、どうもありがとうございました。

それでは、今のこの応援プログラム、参画プログラムについての御質問、また御意見がある方はいらっしゃらないでしょうか。

これからどんどんこの参画プログラム増やしていきたいなと思ったときに、何かこう3ページ目を開いてみると、文化が41でスポーツが26って、やっぱりスポーツの大会、東京2020ですから、スポーツももう少し頑張ってもらって、もっともっとたくさんの参画プログラムの申し込みが来てもらいたいなというふうにも、何かこの現状を見ると感じます。

そして、機運を高めるといったその趣旨、また思いというのは、多分この参画プログラムに参加する人と、私たちのアスリート委員の思いというのは、非常に近いところにあるのかなと、私自身は感じております。もちろん、それぞれのプログラムの中でアスリート委員の皆さんに声がかかって、一緒に取り組むものもあるとは思うんですが。

こういった中で、これからの提案ですけれども、何かアスリート委員の私たちがこの参画プロジェクトと一緒にタッグを組みながら、東京だけではなく日本全国の皆さん方のその盛り上げに参加をしていくというところに、一緒にやることができてもいいのかなというのを、私自身は感じましたが。何か皆さんはどう思われるでしょうか。

穴井さんは前に、奈良マラソンのときには呼んでくれたら、俺はすぐ行きますとかと言って、すごく盛り上げをするところにも本当に興味といいますか、思いがありましたけれども。

○穴井委員

あのときは余計なことを言ったなと、反省しています。

ちょっと質問になるかもしれないんですけど、NFのそういう関わり方というのは、どこ

に位置づけられるんですか、応援プログラムということでいいんですかね。

○佐々木部長

そういうことになります。

○穴井委員

そうすると、全日本柔道連盟のアスリート委員会が主導で、こういう何か企画をしたいということが、この参画プログラムにつながっていくという認識でいいんですか。

○佐々木部長

そうです。具体的にどういうふうにつなげていくのかというのは、また事務局と調整してまいります。

○穴井委員

先日、全日本視覚障害者大会のボランティア活動をやろうということで、やらせていただいたんですけど。そういうことでどんどん盛り上げて。それも東京都内の高校生を対象に募集をかけて、まずは小さいところから少しずつやっていったんですけども、どんどん広げていこうというビジョンがありますので。これもまたNFのアスリート委員会に持ち帰って、どうですかということで話をしたらいいということですね。

○佐々木部長

はい。

○穴井委員

わかりました。どんどん協力したいと思います。

○高橋委員長

ありがとうございます。

今のように、NFに関わっているところからの参加ということも、これからもっともっと広めていくことはできますし。そういった意味でも、もちろん御質問なんかでも結構ですので、何か御意見、御質問ありますか。

○中村局長

今の穴井委員のお話ですけれども、先ほど高橋委員長のほうから、いろいろな参画プログラムにアスリート委員の方、我々、可能な限りお声がけをしようと思っているんですけれども、まだまだ知名度も低いところもありますので、皆様がいろんなところでイベントにお声がけがあったときに、これ参画プログラムにしたほうがいいんじゃないのって、どんどん主催者の方に言っていただいて、それをまた我々のほうに、今、穴井委員が言って

いただいたように言っていただけると、輪が広がっていくのかなと思っておりますので。そういうところは、ぜひお気づきの点があれば、お願いしたいと思います。

なかなかちょっとスポンサーシップのこととか、いろいろ条件はあるのかもしれませんが、必ずいただいた提案に対してはゼロ回答ということではなくて、何か道を開けるように我々も知恵を絞っていきたいと思っていますので、ぜひよろしくお願いいたします。

○河合副委員長

一ついいですか。大体申請を出したら、どれぐらいで回答をいただけるものですか。ざっと。何か多分、言ったものの間に合わなかったとかという話が出かねないなと、お互いに、思ったときのこともあるので。その辺を教えていただいておくと、我々も呼ばれたときに、こういうのをしたらどうですかと言いやすいなと思ったので。後でもいいです、わかったら教えてください。

○佐々木部長

事前調整をするかどうかというのもありますけれども、約1カ月ぐらいですかね。制作物の関係もありますので。

○河合副委員長

わかりました。

○高橋委員長

今の御意見があったように、アスリートの委員の皆さんは日本全国いろんなところに行かれる機会も多いでしょうし、東京オリンピックですが東京だけではなく、日本全国がしっかりと盛り上がって一つになるためにも、今おっしゃられたようにいろんな場所でこういった参画プロジェクトのイベントのことであったりとか、少しお話をして、広げていっていただく機会にしていただきたいなというふうに思っております。

ほかに何か質問、御意見等は。

三浦さん、お願いいたします。

○三浦委員

これは、いろいろ県とか市とかある、そういうどんなイベントでもそういうのを、これからスポーツのイベントとかがあるのに、このアスリートの参画プロジェクトを絡めていっていいということでいいんですか。

○中村局長

建前として、いろいろ開かれたものであるとか、2020に関係づけられるというのは幾つ

かありますけれども、基本的にスポーツに関するイベントであれば、そういうところは2020年と結びつかないということはないと思いますので、基本的に対象になると思います。

あとは、細かなマークをどういうふうに使うのかとか、後援企業はどうなのかと、ちょっとそこら辺の細かなものがありますので。先ほど申し上げましたけども、なるべく早目に言っていただければ、それだけ相談の時間が長くなりますので、形になる可能性があります。なるべく早く御相談いただければありがたいと思います。

いずれにしても、スポーツ関係のものはなるべく広く取り入れていきたいと思っています。

○三浦委員

ありがとうございました。

○高橋委員長

ありがとうございました。

それでは、次の議題に移りたいと思います。議題3です、開閉会式に向けた基本方針についてです。

事務局のほうから、まず御説明よろしくお願いいたします。

○中村局長

こちらは、先ほど2017年に向けた取組ということで、先般、理事会で森会長のほうから検討を本格化するために、式典委員会を立ち上げようということでお話がありました。式典委員会自体は、この春から発足するものでございますけれども、それに先立ちまして事務局でもいろいろ準備をしていきたいということでありますので、この開閉会式に非常に関わりのあるオリンピアン、パラリンピアンということでございまして、アスリート委員会の委員にも御意見を賜りたいという趣旨でございます。

まず資料でございますけれども、これはもう御案内のとおりでございますが、開閉会式については、参加者数、観客数、視聴者数、テレビ放映国数、予算等々、規模の面からも質の面からも世界最大規模のセレモニーでございまして、メディアを通じていろんな国、いろんな国民に日本の文化や国のあり方などをプレゼンテーションできる機会でありまして、記憶に、あの大会はどういう大会だったかと残る、一つのメルクマールにもなるものでございます。

下が、IOCが定めている開閉会式の基本的な流れでございますけれども、芸術パートに加えまして、ここに幾つか並べてありますが、3番の選手入場であるとか、10番の選手宣

誓であるとか、あとは最後、聖火点灯などが大きなところでございます。

やはり、これから検討の一つのポイントになりますのが、芸術パートのところでございますが、2ページ目に過去大会の特色を掲げさせていただいております。84年のロサンゼルス大会は、フライングマンというのでしょうか、人が小型ロケットを乗せて飛んだことが映像として記憶に残っておりますが、そういったテクノロジーをふんだんに使いまして、そこで開会式のショーアップ化が始まったというふうにも言われております。

2000年のシドニー大会では、アボリジニの方に焦点を当てまして、その国の創生や歴史についてのアピールをした大会でございました。

また、2大会前のロンドン大会は、産業革命の前後のイギリスを模しまして、それを通じて国が発展し、世界に発展を促したといった様子を表現したものでございました。

昨年の夏のリオ大会では、これは御記憶も新しいかと思いますけれども、ブラジルの美しい自然を通して環境の重要性、あるいは民族の多様性などを表現して、非常に大きな話題を呼んだところでございます。

今後の流れでございますけれども、式典委員会が、申し上げたように春ごろ設立いたしまして、まずは、どのようなセレモニーにしていくのかといったところの基本方針の検討から入っていきたいというふうに思っております。それと重ね合わせるように、演出に関わる者の選定や制作の体制なども決めていきまして、大体それが1年ちょっとかかるのかもしれないと思っておりますけれども、その後、制作準備に入りまして、大会本番に結びつけていきたいと思っております。

ここで過去大会の式典についてIOCから映像を提供いただきましたので、それを皆様に御覧いただきたいと思います。

（映像視聴）

○中村局長

ありがとうございました。

見ていただいたことを踏まえまして、本日いろいろ御意見をアスリートの立場からいただきたいものといたしまして、4ページ目に整理しております。オリンピックとパラリンピックの開会式・閉会式で表現されてきたことでございますけれども、当然ですが一つはオリンピック・ムーブメントの目的ということで、友情、連帯、フェアプレー等々オリンピック精神に基づいて、平和でよりよい世界をつくっていこうといったことが基本にございますし、パラリンピックの価値ということで、勇気、強い意志、インスピレーション、

公平といったところがその根底にございます。

その上で各大会いろいろ申し上げたように、また今、見ていただいたように特色を持ちまして、ロスのショーアップ、テクノロジー、シドニーの先住民の歴史、ロンドンの産業革命、リオの環境や民族多様性等々がハイライトされたところでございます。

それでは、2020年大会の開閉会式では何を表現したらよいか、我々のビジョンの中ではメルクマール、スポーツには世界と未来を変える力があると、全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承、そしてイノベーティブな大会にしたいということをうたっております。こういったものを、じゃあ具体的にどうしたらいいのかということでございます。

一番最後には、リオの閉会式、オリンピック・パラリンピックがございます。ここでは、佐々木宏さん、椎名林檎さん、MIKIKOさんなどがリーダーシップをとっていただいて、安倍マリオとかですね、LEDなどを使った、テクノロジーを使った一方で、ダンスの振る舞いのところでは伝統的な振りを行ったり。パラリンピックのところにおきましては、下にありますとおりGIMICOさんなど障がいを持った方々が、楽しく活発に踊るようなダンスを披露したというようなところもございます。こういったものも御参考にしていただいて、いろいろこういうものができるのかできないのかとか、こういうふうにしたらいいんじゃないかとか、皆様の御意見、御経験をもとに御意見を賜れればありがたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

○高橋委員長　ありがとうございました。

それでは、ここから皆さんに御意見や質問をお伺いしていきたいと思うんですが、今まで参加をしたオリンピック・パラリンピックの中で、こういうところが非常に自分の中では残っているだったり、非常によかったなと思うことでもいいと思いますし。こういった表現ということだけではなく、これに関しては、多分これからいろんなところで話し合いがあると思うんです。私としては、こういうことも必要なのかな、やっぱりアスリートの人たちが開閉会式に参加をするときに何を求めるかですね。

例えば私であれば、開会式は疲れるかもしれないから、さすがに行くことができないかもしれないというような形で、どうしても競技のことをイメージ、考えてしまって、それを選択するような感じになってしまう。なるべくアスリートの人たちが開閉会式に出ても体力を使わずにといいますか、温存をしながら楽しむことができて、競技に結びつけるようなことができたらいいのではないかなというふうに。アスリートの目線に立って開会式をどういうふうにしてもらうといいのかなというのが、ここで皆さんしか言えないことな

のかなというふうにも思うので。そういったところでは、どうでしょうか。

例えば、非常に待ち時間が長くてですね、経験があるとは思いますけれども、その待ち時間をどういうふうに解消をするか。また、入ってからずっと立ちっ放しでいる時間を、やはりどういう軽減をするのかというところは、私は開閉会式においては、非常にアスリートにとっては大切なところだと思うんですが。皆さんも御経験があると思います。

きっとこれは、非常にたくさんの意見が出るのではないかなとは思っておりますが、何か気づいた点、また、こうなっていれば参加がしやすい、またよかったなというふうに経験の上で思うことがあれば、積極的にぜひ御発言よろしくお願いいたします。どうでしょうか。お願いします。

○杉山委員

杉山愛と申します。久しぶりのアスリート委員会に出席で。

本当に、私自身、4回オリンピックは出場していますけれども、実際に開会式に出たのは1回になります。というのは、やはり委員長がおっしゃられたように、やはり体力温存であったり。実際に間に合わない、ほかの競技イベントに参加していて、出られなかったということもあったんですけれども。

やっぱり本当に待ち時間が長いので、とはいえこれだけの大きな開会式・閉会式ですので、やはり待つ順番、選手も関係者も待たなくてはいけないということは絶対的に余儀なくされることだと思うので。快適に待ち時間を過ごせるような、私たちは実際にプールだったりとか、座って待つことはできましたけれども、意外にやっぱり会場に入ってから、式典が始まって、かなり長い時間、立って待っていなくてはいけないということがあったので。もしかしたら、もうちょっと座ってもいいような。なかなかそれはきちっとした日本では難しいのかもしれないんですけれども。少し選手が座ってもいいような、楽な感じで、なるべくやっぱり選手に参加してもらえるような工夫というのは、もしかしたら必要なのかなというふうに思います。

○高橋委員長

どうでしょうか。

小宮さん、よろしくお願いします。

○小宮委員

ゴールボール競技の小宮です。私は、過去4回パラリンピックに出場させていただき、ほぼ開会式・閉会式には参加しています。やはり、待ち時間に体力を奪われる感覚はあり

ます。過去の大会で、待ち時間に椅子などがあり飲食をしていた時は、短く感じたと思います。開会式・閉会式に参加したいという選手は多いと思うので、待ち時間の工夫があれば嬉しいです。

また、私は視覚障がい者なので見る事の楽しみがなく音で楽しむことがメインとなります。視覚障碍者だけではないですが、選手が体感できる仕掛けがあると嬉しく感じます。

閉会式では、オリンピック・パラリンピックの選手だけではなくてボランティアの方とか、地元でのいろんな応援の方々もいらっしゃるので、日本そして世界が一体感になれる何かがあるとよいなと漠然と感じています。具体性がなくてすみません。

○高橋委員長

及川さん、お願いします。

○及川委員　車椅子バスケットボールの及川です。

僕は、選手でシドニーに行って、コーチでロンドンとリオに行きました。長いというのは多分、皆さん絶対に言うことだと思うので、それは言わないとして、僕は開会式・閉会式でよかったことを挙げたいと思います。

一つは、一番僕が開会式で大好きなのは、入った瞬間に国の名前を呼ばれて、大歓声の中で、ジャパンと呼ばれて、わあっという、あの瞬間に自分が歩いていくというのは、もう今でも忘れられない、パラリンピックの中では、競技よりも大好きな瞬間といってもいいぐらい感動的な瞬間で、そこは非常に選手としては絶対欲しいというか、というところ。あそこを演出してもらったりとか、何か考えるというのが一つあるのかなというふうには思います。

もう一つ、開会式というわけではないんですけれど、開会式に、僕はリオは行かなかったんですね。次の日にもうお昼から試合があったので。行かなかった人たちの選手村では何もないという。例えば、ビックスクリーンがあって、みんなでそこで観るとか。私はちょっとマックを買いに行きながらとかということはしていたんですけど、みんなぼそぼそぼそっと暗い選手村で、誰もいない、食堂もがらがらみたいなのが。ずっといて、待っているほうは非常に罪悪感をちょっと感じるというか、そういうことでした。

なので、選手村が開会式の時間に盛り上がるというのも何か一つの工夫かなというふうに思います。行けないのはしようがないことだと思うので。

閉会式に関しては、リオの経験なんですけど、正直あまりいい結果が僕ら競技では出なかったと僕は思っていて、非常にショックで立ち直れないぐらいなときに、閉会式なんか

行くかと、という気持ちになりました。長いし、何やるかわからないしみたいな。

ただ、行くということを決めて、僕は行ったんですけど、行って何がよかったというと、やっぱりボランティアの人たちを含めて、ありがとうという、こんなすばらしい大会をつくってくれてありがとうという温かい気持ちをものすごく感じたんですね。ああ、僕なんてちっちゃいんだと思ったぐらい、すごい感動しました。

それと、やっぱりリオ中に、リオの競技中につくられた感動的な選手たちのシーンがいっぱい出てきたんですね。そのときにやっぱり、僕はアスリートじゃないんですけど、ああ、僕はこれをやりたかったんだと。これをやるためにリオに来たんだというのを思い返したというか。ああ、やっぱりリオは、本当にたくさんのすばらしい選手たちの活躍があって、夢のような場所だったという。それを確認できた閉会式で、最後に皆さんに、本当にありがとうとボランティアさんからずっと声をかけられたというのは、閉会式のすごい、いい思い出になったというふうに思います。

○高橋委員長

ありがとうございます。

これからこの開閉会式については、委員の皆さんにずっと御発言していただきたいと思うんですけれども、今、まず3人お話しをされたように、この開閉会式でよかった点、そして、こうしたらもっといいんじゃないかなという点ですね。そして、最初の発言いただきたいことというのもありましたけれども、日本ならでは、こういうことが発信できるというのがもし、今、頭の中に浮かんでいるものがあれば、そういったところもイメージして、ぜひ発言をいただければうれしいのかなというふうに思います。

それでは、私が皆さんを指名していっても大丈夫でしょうか。

こちらのところをずっと来ましたので、関根さん、お願いしてもいいですか。

○関根委員

日本らしいということですかね。

○高橋委員長

先ほど言った、いいところ悪いところも含めて、どんな話をしていただいても大丈夫です。

○関根委員

その前に一つ、私もアテネの閉会式で感じたんですけども、ショーのほとんどが高台というか高いところでやっていて、選手の私は何もほとんど見えなくて、ただコンサートぽ

い、歌手が歌っているのとか、でも顔も全然見えないし。ただ、すごくわあっと盛り上がっている中を私たちはバッジを交換したりとか、そういう混乱した中でというか。ショーは本当にほとんど見えなくて、テレビを意識したのか周りの観客かわからないですけれども、そういう状況だったので、ちょっと残念というか、もったいなかったなという気持ちが今あります。

あと、芸術の部分に関しての私のアイデアなんですけれども。私は現役時代に古武道、武道の先生に体の使い方を習ったことがありまして、それはやはり体格のいい西洋人に体格で劣っている日本人が対抗するという意識のもと、柔よく剛を制すじゃないですけど、それでちょっと習っていたことがあるんですけど。

武道の先生なんですけど、今、ヨーロッパを中心にクラシックバレエとか、体の日本の使い方をヨーロッパで広めている先生なんですけど。その先生はたまに日本で武道の考え、達人の極意で、西洋だと戦って制圧するという考え方なんですけど、日本古来の意識というか極意で、共存するとか同調するとか、戦わない、対峙しないという考え方があって、それをコンテンポラリーダンスで表現しているんですけど、そういうエッセンスをちょっと取り入れてもおもしろいのかなというふうに思いました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

では、萩原委員お願いします。

○萩原（智）委員

こんにちは。よろしくお願いします。

私、シドニーオリンピックに出場させていただいたんですが、正直、競泳は翌日から競技がありますので、開会式に出ていません。そして、早く終わってしまうので閉会式にも出ていません。選手村でテレビをみんなで観て盛り上がっていたというのは一つあります。

ただ、私もリオデジャネイロのパラリンピックの開会式ですごく感じたんですけども、開会式で入場してくるシーンの周りでボランティアの方が盛り上げてくださっていたんですが、その中に健常者も障がい者の方もいらっしゃって、すごくそれが私にとってはうれしかったというか、すばらしいことだなと思ったので。それがパラリンピックの開会式だけではなくて、オリンピックの開会式でも同じような風景が見れたら最高だなというのを一つ感じました。

あと、日本でスポーツといえば、私が何となく感じているのは、クリーンなイメージが

すごくなるので、やはりアンチドーピングのことも何か、どこかで盛り込めたら、世界に発信していく上で。今すごくドーピング問題で世界が揺れていると思うので、一つ大きな機会になるんじゃないかなと考えています。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

それでは、不老委員、お願いします。

○不老委員

開会式については非常に待ち時間が長いわけなんですよね。しかし、入場することにおいて、またアスリートは新たな感動を覚える。その感動が、要するに競技にどういうふうに伝わっていくか、いろいろメンタル的に考えていくわけなんですよね。これがいい方向に自分が思えば、成長していきましょうし。これはやはり、開会式は大事だと思うんですよね。

そこでこれからの、要するに東京オリンピックについては、皆さん方の御意見を聞きながら、アンケート的に出されたらどうだろうかと思います。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

では、三浦委員、お願いします。

○三浦委員

私は、アテネと北京と、あとリオの閉会式には出たことがあるんですけど、開会式には1回も、競技の関係で出れなかったんですけど、やっぱり今言われたみたいに、開会式に出ることによって選手がすごい、いろんなモチベーションが上がるということが多分あると思うので、それを経験していないのでまだわからないんですけれども。

いきなりオリンピック初出場の選手が初戦を戦うときに、やっぱり開会式でのオリンピックという、その雰囲気とか、そういうのをまず味わっておくことが、初戦の戦いにもっと楽に入っていけるんじゃないのかなというのをちょっと思うんですけど。

そのスケジュールを変えるというのはなかなか難しいとは思うんですけど、全ての、せっかく日本でやるオリンピックで選手が、どこの国の選手もそうなんですけど、開会式に出れるというスケジュール的なものは難しいですよね、です。合わせて行くというのはす

ごく難しい、簡単にこうやって言っていることはすごく難しいことなんですけれども、そういうことがやっぱりできると、もっともっと何か、もっといいモチベーション、選手のモチベーションにもつながっていくんじゃないかと思うので。そういうこともできるんだったら考えてみてほしいなというところと。

あと、リオの閉会式ですごくよかったのは、日本の、今まで閉会式に出たんですけど、漫画が出てきたのは初めてだったような気がするんですけど、世界は、日本イコール漫画というイメージがすごく強いと思うので、漫画が出てきたときに会場が一気にわあっとなったのが、イメージがすごくあるので。やっぱりそこが、その漫画と日本をうまく、閉会式のつながりで開会式につなげていけるともっといいんじゃないかなというのを感じました。以上です。

○高橋委員長

どうもありがとうございます。

それでは、穴井さん、よろしくお願いします。

○穴井委員

もう話すことないですけどね、これだけ皆さん言っていただいて。

私もロンドンだけしか出ていませんし、開会式も実は出ていません。選手負担ということで、ほとんどの選手が出ませんでした。特に柔道は初日から始まりますのであまり出る選手がいませんでした。その点はいろんな解消方法はあるのかなと、私が口を挟むところじゃないかなとは思うんですけれども。

何を表現したらよいかというところで、これは皆さんがどうお考えかはちょっとわからないですけど、こここそ復興五輪なのかと思ったりもするんですよね。いろいろとあると思うんですけれども。いろいろと世界中から御支援をいただいて、今日の日本があり、またそこを一つのテーマとして我々もこのオリンピックにかける思いというのもあると思いますし。感謝の言葉を伝える場というのはなかなか、あるんでしょうけれども、こういう大舞台を使わせてもらって、世界中の人との友情であったり連帯であったり。そういったところから、本当の意味でのフェアプレーの精神というのは生まれるのかなというふうに思いますし。

授業でオリンピックの授業をやっていて、開会式を学生に見せるんですけど、何のことなのかってやっぱり昔のことになるとわからないんですよね。要するに、その大会ごとのタイムリーな話題というのは持ってきているのかなというのは印象としてありますので。

その点でいうと、やっぱり東京大会こそが、そういう皆さんのおかげでこの大会ができるんだという日本の心というか、そういったものを表現できたら、また改めて、まあ思い出したくない方もいるかもしれませんけれども、そういうことを世界に発信した上で、オリンピアン、パラリンピアンを通して、スポーツの力がみんなの、世界を変えるんだということを表現できるかなと思います。それぐらいです。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

では、河合副委員長もよろしくお願いします。

○河合副委員長

ありがとうございます。

僕は6回パラリンピックに行ったんですけど、皆さんからすると意外かもしれません。6回とも開会式に出ていますし、閉会式も出ています。今回は開会式と閉会式、両方見させていただいているというので、経験をすごくさせてもらったなと思います。

先ほど及川委員からもあったように、一番、選手として開会式で何が楽しいかといったら、入場した瞬間と、聖火がついたときが一番印象が強いなと思っていますので、そこの演出とかをどうするのかというのはこれからなんじゃないかと思います。

何度もあったように、待ち時間が長いとかあったんですけれども、その待っているところをどう楽しく過ごさせるかというのも。

もう待つのはしようがないと思っているので、例えば待っているときに、いつもスニッカーズとかああいうのを多分配られて、バナナとジュースぐらいで、待ってろ的な感じがあるんですよね。それをちょっとポッケに入れていて、入場した後にスタンドで食べていたらそれをNHKに撮られて、後で流されて、おまえ食ってただろうと後でメールが届くみたいなことがあったりとかなかなか。なので、待っているスペースで、例えば、わからないですよ、たこ焼き屋をやっているとか、たい焼きが並んでいて、そういうので結構わきあいあいできてもいいのかなとかも思いました。

あとは、結構、IPCの会長の方の挨拶とか結構、一生懸命に聞こうと思うんですけど、英語だったりするのでわかりにくとか、それこそブラジルだとポルトガル語でわからないとかがあるので、この辺はテクノロジーなのかわからないですけど、イヤホンをつけたらそれぞれの国の言葉ですぐに変わったのを聞けるとかというのも、例えば紹介の中では今

後いいのか、これはジャストアイデアですね、今のは。なんですけど、そんなのと。

先ほど小宮さんからもあったように、やっぱり私も行っていて、全然見えないのでわからなくて、途中でどうも眠気に負けそうになった。負けたとは言わないです、負けそうになったなという記憶はちょっとあるので、そういうところも含めて、一緒になって動きがあるようなものを。わからないですけど、ダンスなのか、そういうものがそのころに例えば流行して、恋ダンスみたいなのかもわからないですけど、そういうのがはやって、みんなでやるシーンがあったりとかして一体感ができていくと楽しめるんじゃないかなというふうに思いましたし。

あと、及川さんが言っていたように、開閉会式とかのところで選手村の皆さんでも盛り上がれるようなことも何か仕掛けてもいいなと思いました。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

私が最初に待ち時間がとかと言ってしまったことが、最初にちょっと、皆さんをそちらに誘導してしまったような形になってしまったのかなと、申し訳ないなとも思いましたが。

私はどこかの大会で、選手入場は割とイベントが終わって最後のほうにあって、そこの間ずっと外に並んでいてということが多いんですが、どこかの大会で、選手入場は最初のほうに行って、選手は着席して、そのイベント自体も選手たちが見ることができる。その順番を少し変えるだけで、選手の人たちも開会式を一緒に楽しめるって、なかなかいいアイデアだなと思って見ている大会がございました。

それだけでも、もちろん拘束時間は長くなるのかもしれませんが、開会式をやっている間中もずっと外に並んでいることが多いので、それであれば最初に入ってみんなで一緒に、開会式を選手も楽しんだ上で。順番を変えるというのも一つの手なのかなというふうに思いました。

また、閉会式では、私自身すごく思い出があるのは、入ってきた後でも、日本選手団だけなくて、ほかの選手団、もう本当に違う競技で、テレビで応援していた人たちのところに駆け寄ることができて、そこで初めてすごく多くの人たちと国境を越えて触れ合うような機会があったというのが、ほっとしているからか、ものすごく自分もおおらかになって、いろいろなところに行くことができて交流を持てたというのが、すごくいい思い出になって残っています。もちろん、写真も撮りますけれども、緊張が解けたところで、そういっ

た交流の場を広げるような閉会式というものもすごくよかったなというふうに思いました。

また、私は開会式自体は、シドニーオリンピックで参加をしていないんですけれども、現役を引退してキャスターとして何回か開会式・閉会式に参加をさせてもらうと、今まで見えていなかった視点からいろんなものが見えるのかな。選手だとどうしても試合のことに集中しているので、どちらかというと見えていない部分も、観客席にいると、あ、この今の瞬間が、世界の全ての人たちが同じ瞬間を共有しているんだなって、それだけものすごく発信に力もありますし、皆さんが興味を持っているところもそこで共有ができるといったところでは。

やはり、歴史を割と伝えるところが非常に多い、オリンピックは多いんですが、やはりそこの土地のことを知ることによって、ものすごく身近に感じることができる、そんな開会式なのかなというふうに思ったりもします。

また、今お話があったように、やっぱり日本の文化を伝えること、日本の、ある意味テクノロジーを伝えること、そして、復興という言葉もありました。こういうのを見ていくと、この東京2020参画プログラムの枠組みのスポーツ、健康であったり、まちづくりであったり、復興であったり、経済、テクノロジー、教育、文化というこの8個のこの枠組みがそのまま東京、そして日本が発信できるすばらしい特徴なのかなというふうに思ったりもするので。

何かこの部分がしっかり落とし込めるような、そして参画プロジェクトも、私たちがやっていることが開会式につながっていくんだみたいな形で、2時間だけを盛り上げるのでなくて、今から、参加をしている皆さん方が開会式をつくり上げるんだみたいな形で、この参画プロジェクトをうまく利用しながら、みんなの思いが大きくなって、日本の皆さんの思いがこの開会式の2時間に集約できるような、そんな開会式になればいいなというふうに思いました。

最初に意見をされた方は、話を聞いていて、そうだな、こんなところはというようなところはございませんでしょうか。

もちろん、この開閉会式については、多分、皆さんいろいろ経験もされていますし、意見もたくさん出てくると思います。今、言えなかったこと、まだ言い足りなかったこと、後から思い出して、こんなことを気づいたということがあれば、ぜひ終わった後にでも連絡、そしてメールなどでも受け付けておりますので、よろしくお願いします。

また、こちらのことやWG2のところでも、もう少し細かく皆さんの意見、アスリート委

員だけではなく、近々でオリンピック、パラリンピックに参加をした選手からもいろんな意見を聞きながら、もう少しこのアスリートの意見ということで固めていきたいと思いますので、今日出た意見というのをしっかりとWG2のほうにも、そして今日、御参加をいただいた開閉会式に関わる皆さんにも認識をしていただいて、つなげていかせていただきたいなというふうに思っております。

それでは、ありがとうございました。

それから、続いての議題に移らせていただきたいなというふうに思います。

議第4になります、都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクトについてです。

まずは、事務局のほうから御説明をよろしくお願いいたします。

○中村局長

資料6でございます。先ほどの開閉会式のところで、最後に高橋委員長から言っていただいたように、いろいろ参画プロジェクトを今進めておりますけれども、なかなかそのプロジェクト自体は非常に盛り上がっても、2020との結びつきがなかなか具体化しないところは一つの悩みであることは事実でございます。今から紹介するメダルプロジェクトは、まさに今やっている一人ひとりの参画のあり方が2020年の大会に直結するという意味では非常に画期的な、あと、みんなが喜んで参加できるようなプログラムの可能性がありまして、ぜひ、アスリート委員会の皆様とともにも盛り上げていきたいという思いを持っております。

1ページ目に全体の構図を示しておりますけれども、一つは、その大会に向けた盛り上げということで、国民への大会への参画、エンゲージメントを一つの柱にしております。リサイクルをメダルに活用しようというのは、実は過去大会にもございまして、例えばバンクーバーであるとかリオでも行っておりましたけれども、それはメダルをつくる材料として、たまたまそういったリサイクルを使ったという後づけでございますけれども、今回はむしろ国民、都民に働きかけまして、ぜひあなたが持っている携帯であるとか、小型家電であるとかパソコンであるとか、そういうものを2020年のために、使っていなければ拠出してくださいという、参画へのエンゲージメントと結びつけているところが非常に大きな柱になっております。

今申し上げましたように、それが2020年の大会時にメダリストの胸に輝くメダルとして結実してというところでございます。それにとどまらず、こういったリサイクルの意識がこのメダルプロジェクトに伴いまして根づけば2020年以降、リサイクル社会がより深いと

ころで、都民、国民の意識に根づけば、これはレガシーとしても成功したということが言えると思っております。

このメダル製作に関して、2020が初めてとなる三つのポイントというのがございまして、ここは今申し上げたように参画と結びつけたところと、あとは金銀銅、全て必要な量を都市鉱山から賄うというところも過去大会にないところでございます。さらに、日本の誇る技術もこれに活用されておりまして、ちょっと技術的になりますが、なかなか精錬の過程、どうしてもリサイクルの金属を使っても、ほかの金山から、直接入ってくるような金とか銀がまざってしまうことが普通でございまして、過去大会でもそうでございましたけれども。金につきましては、そこは確実に皆様から拠出いただいたスマホとかパソコンから抽出したその金そのものがメダルになると。逆に言えば、金メダルになる金は全てこのプログラムから出てきた金で賄おうというところが初めてとなるポイントでございます。

事業協力者といたしまして、10月下旬ぐらいからスタートいたしまして、二、三カ月かけまして選定をいたした結果、ここにありますNTTドコモと、一般財団日本環境衛生センターの二つの事業者の方と一緒にやっていこうということになりました。この選ぶプロセスに当たりましては、オリンピアンとして組織委員会で金メダルをとられた谷本理事に御参画をいただきました。

それぞれ特色がございまして、NTTドコモは携帯電話を活用するということで、全国に散らばるドコモショップで使わなくなった携帯を集めることができると。下の日本環境衛生センターは、これは環境省の関連する団体でございまして、政府が後押しをしてくださいまして、全国のリサイクル業者と結びつきまして、これは全国の自治体と一緒にこの回収に携わってくれるということでございます。

昨日も東京都のほうで、都知事がこれに先立ちまして、携帯をみんなで集めましょうと呼びかけていただきましたし、来週には政府のほうでもイベントを予定していただいているというふうに聞いております。

これは非常に大きな反響を呼びまして、3ページ目でございますが、これはスポーツ局長の室伏さんのつてでお願いしたところでございますけれども、ロンドンとリオの陸上10種で金メダルをとったアシュトン・イートンさんから、早速このプログラムを発表した日にメッセージをいただきました。この2段落目でございますけれども。

東京2020プロジェクトによって、アスリートが感動のストーリーを伝えるだけでなく、一つ一つのメダルそのものにストーリーが生まれるのです！このプログラムの一番素晴ら

しいところは、国民の皆さんがメダルのストーリーの一部になる機会を得られ、持続可能な未来についての認識を高め、そして新しい方法で貢献することができることです。誰もが「オリンピックの旅」に参加できるチャンスがあるということは、非常にエキサイティングなことです。

というメッセージをいただきました。

あとは、内村航平選手やウィルチェアーラグビーの池崎選手からもメッセージをいただいております。

そのほか、国内でも多く取り上げられましたけれども、国内だけではなくて海外メディアにも非常にこれは2020の東京大会の非常にエポックメーキングな取組だということで、120以上の媒体で好意的に、アスリートの声とともに報道されました。

こうした動きをぜひ、これは4月1日からスタートいたしますので、4月1日以降、またアスリート委員の方々のサポートもいただきながら、大きく育てていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。以上です。

○高橋委員長

ありがとうございました。

それでは、このみんなのメダルプロジェクトについての御質問、また御意見のある方を伺いたいんですが、まずは、河合副委員長のほうから御意見をお願いいたします。

○河合副委員長

御説明いただいて、本当にありがとうございました。私も家に幾つか携帯が眠っている気がしますので、多分こういうのを持っている、多分あと3年半に機種変がなさそうな人は、アスリート委員1人もいないんじゃないかなと思いますので、そういうときとかにFacebookとかソーシャルメディアを通じて、統一したハッシュタグがいいのかわからないですけれども、そういうものでどんどん、こういうので協力しました、みんなでやりましょうみたいなのを、やっぱりこれはまめに出していくのがいいのかなと思いました。

それが、集める場所がいろいろ、全国のドコモショップもやっているのであれば、いろいろなところもあるでしょうし、ドコモじゃない携帯の人は違うところがあると思うので、いろいろなところがあろうかと思いますが。いい意味で活用いただけるといいのかなというふうには、すごく思っていますので。何か協力することがあれば、いつでも行きます。

以上です。

○高橋委員長

先ほど御説明にもあったように今していることが、本当に大会につながっていくといった部分では非常に皆さんも関わっていくことのできる、そういうまた、このプログラムなのかなというふうにも思います。どうぞ。

○河合副委員長

言おうと思っていたことを思い出しました。せっかく、出したら、あなたのがこうやってメダルにつながりますよ的な証明みたいなのを印刷できるような、フォーマットでもいいんですけど、ホームページ上でとか、何かもらえるとうれしいのかな。

例えば、協力したよという証明につながるようなもの。そのペーパーが例えばエンブレムに入っているとか、そういうもので示されていくと、自分はこのメダルに参画したというのをやるのに一番。その場合、何か別のものをもらえればいいんでしょうけど、その辺お金の関係もあろうかと思いますので、いい形で。でも、参画したということをいつまでも、例えば言えるようなものを残してあげるのも、ちょっと御検討いただいたらいいかなと思いました。

○高橋委員長

いろんなところで、こちらもこのプログラムを皆さんに広めていく、いろんなイベントなんかでも皆さん自身が集める側に回るということもできる、そういったプロジェクトだと思います。

何か御意見や御質問などがある方はいらっしゃらないでしょうか。

では、今もお伝えしたように、いろいろなところで皆さんからの、皆さんの声というのは非常に多く、強く皆さんに届きますので、いろいろなところでこういったプロジェクトを広めていただくというのも一つ、皆さんの中に置いておいていただいて、ぜひ活動していただきたいなというふうに思います。

それでは、続いての議題にまいります。

議第5です、選手村の会場コンセプト計画及びマスタープランVer.1について(案)です。

事務局のほうから御説明よろしくお願いいたします。

○吉村局長

選手村の運営を担当させていただいております吉村でございます。よろしくお願いいたします。

資料7の選手村の会場コンセプト計画及びマスタープランVer.1について（案）の資料を御覧ください。開いていただいて、選手村に関する初期段階の計画である会場コンセプト

計画、マスタープランVer.1について、今IOC及びIPCと調整しているところでございます。

会場コンセプト計画というのは、招致時のコンセプトを設計計画としてハード面を中心にまとめた初期段階の計画で、これから設計、具体的に図面をつくっていく上での考え方をまとめたものでございます。今後の検討内容はオーバーレイ計画に反映して、選手村としてつくり上げていくということになります。

一方マスタープランは、運営計画としてソフト面を中心にまとめたものでございまして、今回はVer.1ということで、以降、Ver.2、Ver.3ということでだんだんと内容をブラッシュアップしてまいります。

両計画とも招致ファイルや2014年度に策定いたしました大会開催基本計画を踏まえて策定した初期計画ですので、今回は簡単に概略を御説明申し上げます。

選手村の運営の鍵を握るサービスレベルの検討に当たって、選手村のミッション、目標はとても重要なものになります。大会開催基本計画において既に定めている二つのミッション及び五つのカテゴリーに分けた目標を会場コンセプト計画マスタープランVer.1の計画に掲げてございます。

ミッションは、温かく機能的な選手村の提供と、選手団が交流を深められるような雰囲気とプログラムの提供の2点、そのための目標を、居住、文化、レガシー、ダイバーシティ、パラリンピック移行の五つのカテゴリーごとに設定しています。

次に選手村の機能についてですが、選手村の持つべき機能を利便性・効率性、安心・安全、アクセシビリティ、周辺・居住環境、持続可能性の五つの観点から設定し、村内の配置等の検討を具体的に進めてまいりました。

選手村内の配置は、居住ゾーンとビレッジプラザ、運営ゾーンの三つのゾーンに分かれております。居住ゾーンは、民間事業者が建設するマンションを大会時に選手村仕様の宿泊棟として使用するもので、14階～18階建てのマンションが大会後につくられるわけですが、その21棟を選手村として使うものでございます。

アクセシビリティに配慮し、宿泊施設としてIOC、IPCの施設要件であるシングルルーム9m^{2}以上、ツインルーム12m^{2}以上、また、オリンピック時に4ベッドに対して一つの浴室、パラリンピック時には3ベッドに対して一つの浴室などを確保して、約4,000戸の住居を整備し、オリンピック時に1万8,000ベッド、パラリンピック時に8,000ベッドを配置する予定でございます。

選手がアクセスしやすい中心部にダイニングホールや選手村の医療施設となるポリクリ

ニック、これにはドーピングコントロールルームも含みます。また、スポーツコンプレックス、スポーツジムです。それから、ゲームコーナーなどのレクリエーション施設を配置する計画でございます。

次のビレッジプラザは、選手のゲストやメディア関係者が交流できる施設になります。施設の構成は、選手の生活を支える雑貨店であるとか銀行、美容室などの店舗、それから各選手団を歓迎するチームウェルカムセレモニーの会場や、ゲストバスセンターやメディアセンターを設置し、円滑な手続が行えるようにいたします。

最後に運営ゾーンでございますが、選手が最初に到着し、入村手続きを行うところでございますウェルカムセンター、それから我々の運営のための倉庫で~~の~~ロジスティック複合施設である設備サービスセンターなどを設けます。また、選手村の中央部には各競技会場への送迎用バスの発着場となる輸送モールを整備する計画です。

先ほど河合副委員長からのお話にもありましたとおり、2月10日に開催したこのアスリート委員会のWG2において、今、御説明した二つの計画について、選手村に必要な機能や宿泊施設の内装等も含めまして、アスリートの方々からさまざまな貴重な御意見をいただきました。続けて、来月の初旬にも引き続きWG2を、選手村について開催いたしますので、お時間のある方はぜひ御参加いただければと思います。

現在、検討の最中でございますので、選手村内の運営面等について、引き続きアスリートの皆様の御意見をいただきながら、着実な大会準備を進めてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

説明は以上でございます。

○高橋委員長

ありがとうございました。

今の説明に、御質問、御意見ございます方は、ぜひ挙手のほうをお願いいたします。

この選手会場、選手村については、このアスリート委員会が始まってからも、最初から、何回も何回も話し合ってきたことでもあります。WG2のほうがまた細かにという話がありましたけれども、少しずつ形になっていくことができればいいのかなと。またその中で、なかなかWG2の会議のほうには出席ができないという方は、ぜひ意見などをこれからも出していただきまして、それをその会議に反映させていくようにしてまいりたいと思いますので。この選手村、そして選手会場については、また随時、皆さんからの意見もしっかりと受け止めてまいりたいと思います。

ここまでで、実は予定しておりました議事は全て終了いたしました。

少し早いのですが、今日の議題は非常にたくさんございました。もう一度振り返って、何か御質問、御意見ございましたら。せっかく集まっていただいたので受け付けますが、何かございますでしょうか。大丈夫でしょうか。

前のようにここで何は話し合いを非常に細かにというよりは、WG1とWG2に分けましたので、そちらのほうで活発な御意見をいただきながら、どちらかというとこのアスリート委員会本体のほうでは、報告事項が非常に多くなってくるのかなというふうに思っております。

また、アスリート委員会というのはこの次の日にちというのはまだ決定はありませんが、それまでにWG1、2のほうの会議を重ねてまいりたいと思いますので、ぜひ御参加ください。

それでは、最後に事務局のほうから事務連絡をよろしくお願いいたします。

○佐々木部長

本日は本当のお忙しいところをありがとうございました。特に開閉会式につきましては、皆さんからたくさん御意見をいただきまして、感謝申し上げます。

まず、資料の取り扱いで、3-2のほうは机上配付の扱いとさせていただいていますので取り扱いに注意をお願いしたいことと、あと議事概要につきましては、今後、正副委員長と相談の上、皆さんの名前は伏した形で議事要旨を公開してまいります。

次回につきましては、また7月ごろを予定していますけれども、皆さんの予定を調整させていただきます。

最後に、新聞広告を4月上旬に組織委員会が出します。15段広告で、朝日、毎日、読売、日経に出すということで、5委員長のオリンピック・パラリンピックへの思いというのを少し語っていただいて、そういうのも今検討しておりますので、また委員長とはそのコメントについて調整させていただきたいというふうに考えております。これは五つの委員会の全て委員長のコメントということを私は言っておりますので。それを4月上旬から中旬になるかもしれませんが検討しております。

新聞広告は委員長のコメントだけでなくて、全体のたてつけとしては、メダルのプロジェクトがあって、参画プログラム、そして委員長のコメントというような構成で今考えています。以上でございます。

○高橋委員長

わかりました。

最後になりますが、次回のアスリート委員会の開催時期は未定なんですけれども、相談しましてまた皆さんに御連絡をさせていただきたいと思います。

○佐々木部長

すみません。今日は時間が限られていましたので、先ほど委員長からもありましたけれども、もし御意見があれば、事務局のほうにメールで寄せていただければと思います。

○高橋委員長

今日は開閉会式のことを皆さんに話し合いをしていただきましたけれども、どんな日本ならではの開会式が理想なのかどうか。そして、どんなことがアスリートとして、こうあってほしいなという理想、そしてよかったこと、皆さんの中の思い出に残っていること、何かそういったものをもう一度皆さんの中で整理をしていただきまして、そしてもう一度、これをスタートして、また皆さんから御意見を伺っていきたいと思いますので。ぜひ、いろんな人の意見を聞いたことによってもっともっと膨らむところも多いでしょうから、ぜひそういった意見をこれからも皆さんから集めてまいりたいと思っております。

では、10分ほど早いですが、第7回アスリート委員会をこれで終了させていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。